

1 つ1 つの支え合い

山王中学校 振原 朋生

皆さんは第一次世界大戦での死因が19世紀に行われてしまった戦争と大きく異なることを知っているだろうか。

第一次世界大戦とは1914年から1918年にかけて続いた、同盟国と連合軍の間で行われてしまった戦争のことだ。この戦争の死因の3分の2は戦闘中に亡くなっており、19世紀に行われてしまった戦争の大部分は戦病死であり、第一次世界大戦と19世紀に行われてしまった戦争で大きく異なっている。この違いに私は疑問を抱き、調べると、第一次世界大戦では「医療技術の発達があったものの、犠牲者の全体の3分の1はスペインかぜなどの疾病などによるものが死因であった。」と記していた。戦争についてのニュースを見るたびに思う、戦争への恐怖や人の苦しみがこれを見た時、改めて私は感じた。それはきっと「医療技術の発達があったものの」と記されていたからだと思う。多くの医療関係者が人々が少しでも長く生きられるようにと、苦しむ人が減るようにと願ってくれていたと思う。だが、それすらも戦争はうばうのだ。戦争はおきてはならないと改めて感じた。戦争は人の命をうばい、家族をうばう。終わってもなお、残った者は戦い続ける。続けてしまう。なぜなら、人の心も蝕むからだ。医療関係者の思いも蝕まれていってしまう。だからこそ戦争は人を傷つけ続けるのだ。

この歴史は繰り返してはならない。そのためにこの歴史・戦争がもたらしてきた恐怖・人の苦しみを知らなければいけないと思う。だが、私たちが生きているこの世界から昔ほど「戦争」というワードを聞くことが少なくなったと思う。これではいつしかまたおこってしまうのではないか。私たちはあの歴史・戦争を知っているからこそ引き起こさない。つまり戦争という経験の上に成り立っている反省が私たちの平和へと結びついているのだ。だからこそ昔ほど「戦争」というワードを聞くことが少なくなった今こそ「戦争」について考え、私たちが思う「平和」を見つめ直すことが必要

なのではないか。

そう考えた時、私にとっての「平和」とは何だろう。戦争が起きてない世界か、核兵器が無い世界か。私はわからない。私は今平和かもしれないが、周りはどうだろう。もしかしたら平和とはいえない状態かもしれない。もし日本が平和とはいえない状態であれば、私は平和といえるのだろうか。そう考えるとよく分からなくなってしまう。

私はわからない。だが、これが平和なのではないかと思う。戦争を考え、平和を見つめ直すことは必要だと思う。だが、考える必要がない、見つめ直す必要がない。それが本当の平和なのかもしれないと思う。そう思い気付いた。私の平和は周りの人が作ってくれたものだと。それを互いに維持しあえる、それが戦争のない世界なのかもしれない。

平和について考えて気付いたことは、戦争は話し合いでなければならない。それで解決しなければならない。戦争は1つ1つの戦いではない。必ず全世界の人に影響が及ぶのだ。なぜなら、一つの平和は周りに作られているものだからだ。